



「^{ひょうこう}標高と^{かいばつ}海拔」って、そもそもどこが違うの？

日本の土地の標高(高さ)は、国土地理院が決めっているんじゃよ。さっそく、詳しい人に聞いてみよう！



富士山の高さは3,776mだって誰もが知っていますね。それでは、どこを基準にして測った高さかわかりますか。答えは、海面を基準にして測った高さです。でも、海面は波もあるし、潮の満ち引きもあって常に動いていますね。それに日本は周囲を海に囲まれているから、この海面という疑問も残ります。

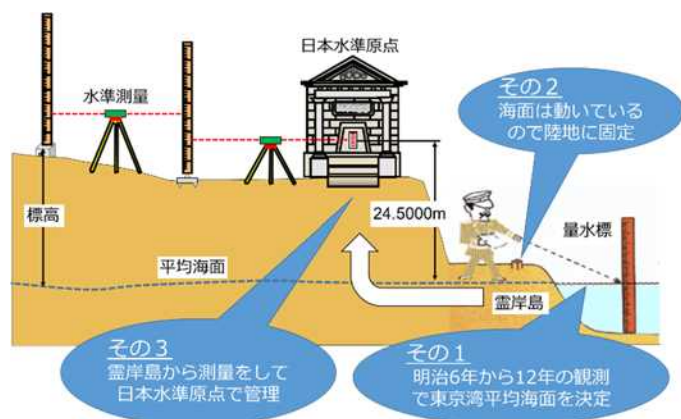
この疑問を解く鍵が日本の地図作成の歴史にあります。日本は、明治時代になって正確な地図作りを開始しました。地図を作るためには、全国の正確な位置(緯度・経度)と高さ(標高)を知る必要があります。日本の高さの基準はこのときに決められました。

今から145年前の明治6年から明治12年まで、東京湾の霊岸島(れいがんじま)というところで、海に物差しを立て、来る日も来る日も海面の高さを測って記録し、約6年間の結果を平均して求めた海面を東京湾平均海面として高さの基準(標高=0m)と決めました。そして、当時の霊岸島に水準点を作って、この水準点の高さを平均海面から2.6210mとしていましたが、日本の高さの基準としてしっかりと管理するため、明治24年5月、国土地理院の前身である参謀本部陸地測量部の敷地内(現在の国会議事堂前の公園)に日本水準原点を設置するとともにそれを格納するための標庫を建て、水晶板のゼロ目盛を東京湾平均海面から24.5000mと決めました。

現在は、関東大地震と平成23年東北地方太平洋沖地震の影響により、原点数値は24.3900mとなっています。全国の土地の高さは、この原点を基準として、3mの物差しとレベルという器械を使った水準測量で、何万kmも歩いて測

量し、水準点の高さを決めるという気の遠くなるよう先人の苦勞によって決められました。

一方で、「この場所は海拔〇.〇メートル」などと書かれた看板をよく目にしますが、海拔とは、近隣の海面からの高さを表す言い方であり、地図・測量の世界では東京湾平均海面を基準とした高さ(標高)を用いています。



(測地部)